

福井県版ポジティブ教育プログラムの実践研究

―学校統合後の小中一貫校および市内全小・中学校での取組みを通して―

教育相談センター 教育相談課

仲野聡美 有田留美子

教育相談センターでは、令和元年度に「福井県版ポジティブ教育プログラム」を作成し、学校や地域の実態に応じてプログラムの実践を支援している。また、本センターと連携して実践研究を進める小中一貫校および全小・中学校で取り組む市を特別研究地域とし、プログラムの有効活用のための研究を進めている。これらの実践研究を通し、本プログラムが、地域全体で取り組むことで地域や学校が目指す児童・生徒像の具現化への手立てとなり、発展性のあるプログラムであることが示唆された。

なお、本実践にあたり、本研究所の特別研究員に就任していただいている立命館大学教職大学院の菱田準子教授から、指導・助言を得た。

*これまでの実践については「研究紀要第 126 号」に掲載

**<キーワード>ポジティブ教育 レジリエンス教育 ピア・サポート活動 学校統合 小中一貫校
市町教委との協働 カリキュラム・マネジメント**

I はじめに

本センターでは、学校サポートプログラム（「研究紀要第 124 号」参照）で県内の小・中学校を支援していく中で、学校が直面する課題を解決するためには、ピア・サポートによる支え合い活動（共助）と同時に児童・生徒自身に困難を乗り越える（自助）力を付けていく必要があると考えた。また、地域（市町や校区）全体で子どもを育てていくことが重要であり、そのために地域全体の学校で取り組む教育プログラム作成が必要であると考えた。そこで、平成 30 年度から特別研究に取り組み、令和元年度にこども園・小学校・中学校でレジリエンス教育を実践し、福井県版ポジティブ教育プログラムを作成した。令和元年度からは、県内初の施設一体型小中一貫校の開校を予定していた角鹿中学校区（角鹿中学校、敦賀北小学校、赤崎小学校、咸新小学校）において、プログラムの実践研究を重ね、今年度は4校が統合し、角鹿小中学校（小中一貫校）としての実践研究を進めている。さらに、令和2年度からは、市全体で取り組むモデルとして、鯖江市全小・中学校においてプログラムの実践研究を進めている。

本稿では、角鹿小中学校において、学校統合における手立てとしてのプログラムの実効性について検証するとともに、施設一体型小中一貫校におけるプログラム実践の有効性について示したい。また、鯖江市においては、市教委と連携を図りながら、市全体で取り組んできたこれまでの実践を振り返り、来年度に向けた課題を明確にしたい。

II 研究の概要

1 小中一貫校での実践研究

(1) 角鹿小中学校について

令和元年度より、角鹿中校区では、4校の統合に向けて、児童・生徒同士の支え合いを可能とした集団づくりを目指して、ポジティブ教育を学校づくりの中核として位置付け、各校で実践を積み重ねてきた。

今年度の4月に小学校3校（児童数 265 名）と角鹿中学校（生徒数 150 名）の4校が統合し、小中一貫校

として「角鹿小中学校」が開校した。校舎は新設され、施設一体型となっている。職員室や特別教室等は、小・中学校で共有化され、教員や児童・生徒の小・中学校間の移動や交流、連絡調整がしやすい。学年段階の区切りは、「6－3」型を維持しており、小・中学校全学年が各 2 クラスで構成されている。

角鹿小中学校では、学校教育目標の「これからの社会をたくましく生きる力を持つ児童生徒の育成」に基づき、研究の柱の 1 つとしてポジティブ教育を位置付け、9 年間一貫した系統的な教育課程を編成、実施している。今年度は、小・中学校でポジティブ教育部を校内研究組織として立ち上げ、9 年間のつながりを意識しながら実践研究を進めた。

(2) 昨年度の課題および今年度の方向性

昨年度、校区全体で年間の見通しを共有して取り組むために、ポジティブ教育推進者会を中心に各校の教員が児童・生徒の実態を踏まえてプログラムを実践できるように支援してきた。4 校の教員は、開校に向けて中学卒業時における「目指す生徒像」を見据えながら、意欲的にプログラムの実践に取り組んだ。昨年度までの課題としては次の三つが考えられた。

- 課題① 推進者会の運営やプログラムの教材研究において、教員の負担感が見られたこと
- 課題② 小小連携や小中連携の視点から、他校と協働して取り組むことに困難さが見られたこと
- 課題③ プログラムの授業実践が中心となり、ポジティブ教育の価値となる「5 大栄養素」や「THRIVE」（「研究紀要第 126 号」参照）を意識して教育活動を行うことが不十分だったこと

来年度以降は、角鹿小中学校の教員でポジティブ教育を深化させていくことになる。このため、今年度は持続可能な取組みにしていくために次の三つの方向性で取り組んだ。

方向性① 研究体制の構築の支援

統合後におけるポジティブ教育の実践に向けて、体制づくりを支援する。研究組織を機能させていくために、所員がサポートしながら担当者の力量向上を図る。

方向性② 小中一貫校の特色を生かしたポジティブ教育の実践

「5 大栄養素」や「THRIVE」を意識し、9 年間を見通したポジティブ教育を実践する。施設一体型の強みを生かし、小中交流の充実や小・中学校の教員が協働で取り組めるように支援する。

方向性③ 小中一貫校におけるポジティブ教育プログラムの編成

カリキュラム・マネジメントの視点で、本プログラムを教育課程に効果的に位置付け、小中一貫校におけるプログラムを編成する。

(3) 実践

ポジティブ教育部は、各小・中学校で選出した部長・副部長を担当者とし、各学年主任を中心に運営している（図 1）。開校当初は、新体制の中での慌ただしさと教員の働き方改革の推進による会議等の削減、さらにコロナ禍であったため、小・中学校の教員が集まって、定期的に研修を実施することが非常に困難であった。そのため、所員と担当者を中心にオンライン会議システムを利用して、開校後の学校の様子や研究の進捗を確認しながら定期的に実践と省察を行った。

昨年度は、小・中学校のつながりを意識して実践したり、小・中学校の教員が協働して取り組んだりすることができなかったことが課題として挙げられた。今年度の年間計画については、昨年度に作成した各校のプログラムの年間計画表を基に、各学年部会で検討し、小学 1 年から中学 3 年までの 9 年間の年間計画表を一本化した。この検討において、プログラムの内容に小・中学校で重なりが見られ、実施時期や計画の見直し、精選が必要となった。今年度は、9 年間の学びのつながりを意識してプログラムに取り組むことで、より効果的に教育課程に位置付けられると考えた。以下に重点項目を示す。

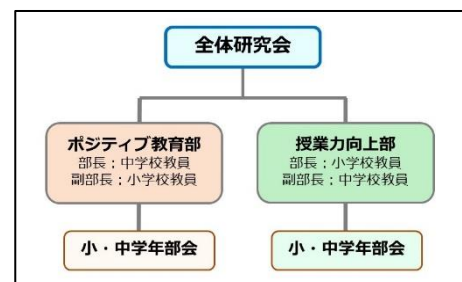


図 1 研究組織図

- ・施設一体型の強みを生かして、小中交流でピア・サポート活動を実践する。
- ・小・中学校の教員が協働し、レジリエンス教育の授業研究を行う。

① ポジティブ教育部を中心とした取組み

ア 統合後における共通理解と共有

開校に伴い、教員の異動があったため、ポジティブ教育の理念について全教員で共通理解をする必要があった。そこで、担当者と所員で打合せを行い、4月の職員会議後に現職教育を設定した。担当者から、ポジティブ教育の概要およびこれまでの3小学校・中学校における実践、今年度のプログラムの年間計画についての説明があり、研究の方向性を全体で共有した。所員からは、「5大栄養素」や「THRIVE」等のポジティブ教育で目指す価値および具体的な行動指標について確認を行い、これらを意識しながら教育活動を進めていくことを提案した。

ポジティブ教育の実践にあたっては、昨年度まで所員と取り組んだ推進体制を生かし、担当者を中心に情報の発信および実践の共有を進めた。これまでのプログラムの実践記録（指導案、板書記録写真、実践後の振り返り）および教材等を学年ごとにデータで整理し、異動してきた教員や若手教員などを含めた全ての教員の負担感を少なくして、プログラムに取り組みやすいように工夫した。また、定期的にポジティブ教育の通信を発行し、実践の授業参観の案内や報告を掲載するなど、小・中学校で実践内容を把握できるようにした。特にピア・サポート活動の実践については、これまでの活動を事例にして運営マニュアルを示し、教員が必要に応じていつでも実践できるようにした。校内の掲示計画としては、校舎の複数箇所に「5大栄養素」や「THRIVE」のボードを設置し、全校で価値を共有できるようにした（図2）。また、児童・生徒、教員、保護者が目にする場所を選定し、ポジティブ教育掲示板を設置した。掲示板には、ポジティブ教育の授業実践の様子を学年ごとに掲示できるようにし、9年間の学びが視覚的に把握できるように工夫した（図3）。

イ ポジティブ教育研修会での実践発表

8月には、菱田教授を講師とし、県内の実践地域や参加希望者を対象にポジティブ教育研修会をオンライン会議システムで開催し、角鹿小中学校は全教員が参加した。研修では、角鹿小中学校のこれまでの取組みを提案発表し、実践地域や学校同士で情報交換を行った。小・中学校の担当者からは、開校に向けての校区全体で取り組む体制づくりや統合後のスムーズな集団づくりを目指したピア・サポート活動の取組み、各校でのレジリエンス教育のプログラムの実践、児童・生徒および教員の変容について発表があった（図4）。

菱田教授からは、「学校統合に向けて方向性を一つにしていくことに課題を感じる場合が多いが、角鹿小中学校では、ポジティブ教育プログラムを手立てに『子どもたちの幸せを願って何ができるか』という視点で取り組んでいる。同じプログラムが重なっても、発達段階



図2 ボード設置



図3 ポジティブ教育掲示板



図4 ポジティブ教育研修会

に応じて視点やねらいを変えることで学びの深まりは異なる。特にスキルトレーニングについては何度も繰り返して取り組んでいく必要がある。」等の助言を得た。

また、他校の参加者からの「小中一貫校になって苦労したことはあるか。」という質問に対して、角鹿小中学校の担当者からは「開校に向けて、何度も担当者同士で打合せを重ね、各学校が同一歩調で進めていくことに苦労したが、統合後の苦労はなく、ポジティブ教育を実践するメリットの方が大きい。」という回答があった。以下に、角鹿小中学校教員の感想の一部を抜粋する。

- ・自校の発表を聞くことで、実践を振り返ることができた。児童・生徒の様子を見ながら軌道修正していくことはとても大切だと感じた。
- ・長期的な取組みとなると、肝心の目的を見失いがちになる。菱田先生の助言を受け、再度このプログラムに取り組む意義と目的を全教員で確認していきたい。
- ・昨年から角鹿中校区に赴任し、ポジティブ教育に取り組む中で、教員同士が子どもたちの幸せのためにどんな力を付けさせることができるのかを真剣に話し合ってきたことは、自分にとってかけがえのない時間となった。今年度もその観点を忘れずにポジティブ教育に取り組んでいきたい。

② 小中一貫校の特色を生かした実践

ア 小・中学校間でのピア・サポート活動の実践

昨年度までの取組みにより、すべての児童・生徒がピア・サポート活動を経験している。今年度は、これまでのピア・サポート活動の実践を積み重ねるとともに、施設一体型の強みを生かし、活動をさらに充実させていくことにした。しかし、体育館や校庭などの新設工事が継続して行われ、コロナ禍において学校全体で小中交流を実施することが困難だった。所員からの提案により、組み合わせる学年や学級を絞り、担当者を中心に教科の授業の中でピア・サポート活動の実施を試みた。

小学5年の担任から、算数の学習で「小数の割り算」を苦手としている児童が多いという相談が中学校の数学教員にあった。そこで、数学教員から中学1年の生徒に話をしたところ、生徒から「自分達でサポートしたい。」という声が上がった。サポート前には、中学生同士で解き方や伝え方、問題につまづいた時の小学生への声かけの仕方について確認し合った。当日は、中学生が小学生の教室に行き、小学生と中学生でペアを組んだ。アイスブレイクで自己紹介をした後、サポート活動を行った。中学生から小学生に声をかける姿が見られたり、小学生から分からない問題を積極的に中学生に質問をする姿が見られたりした。お互いに顔を付き合わせて問題に向き合うなど、温かい雰囲気となった(図5)。また、この活動の様子を、若手の教員や新しく赴任してきた教員などが参観した。授業後には、小学校の担任から「難しい問題に直面すると諦めがちな子が、中学生の寄り添うようなサポートによって、集中して最後まで取り組むことができた。」という感想があった。活動後には、小学生が中学生に「ありがとうカード」を送り、中学生が小学生に「応援メッセージ」を返した(図6)。実践の振り返りでは、中学生から以下のような感想が見られた。



図5 ピア・サポート活動



図6 ありがとうカード

- ・教え方をもっと工夫してできたのかもしれないと思いました。自分を基準にやるのではなくて5年生にもっと理解できるような教え方があったかなと思いました。でも、小学生の計算に丸付けをした時の嬉しそうな顔を見ていたら、来て良かったと思いました。
- ・教える側になって初めて知ることがありました。小数の割り算は自分も苦手なので、「分からない」という気持ちがよく分かりました。また小学生からのSOSがあれば、今日のことを参考にして頑張りたいです。

その他、中学校の家庭科では、コロナ禍で保育園訪問ができなかったため、保育学習の一環として中学3年生と小学1年生の「あそぼうの会」にピア・サポート活動を取り入れて実践するなど、施設一体型を生かした実践が見られた。

イ 小中合同授業研究グループによるレジリエンス教育の授業実践

今年度は、小・中学校の教員が、9年間にわたるレジリエンス教育のプログラムを系統立てて理解していくために、11月の指導主事訪問に合わせて、小中合同で授業研究を行うことにした。実施学年は、小学2年、6年、中学1年とし、小・中学校の教員を混ぜて3つの研究グループを編成した。授業づくりに当たっては、グループごとに指導案の検討を重ね、所員も加わった。レジリエンス教育のプログラムは、各学年の授業に「5大栄養素」の価値が配列されているため、検討会では、小・中学校の教員同士で「5大栄養素」の価値や「THRIVE」にある具体的な行動指標を確認することで、授業で身に付けさせたい力を意識したり、小・中学校で学ぶプログラムの内容のつながりを理解したりすることができた。また、小・中学校の教員が互いに積み上げてきた実践を共有したり、発達段階に応じた指導について話し合ったりする姿が見られた。

当日は、助言者として菱田教授を招聘し、グループごとに授業研究会を行い、その後全体で研究会を行った(図7、8)。菱田教授からは、「小・中学校の教員が、同じ目標に向かって一緒に教育活動に取り組んでいく姿は、レジリエンスの高い組織だと感じた。レジリエンス教育の授業では、教師自身が『なぜこれを学ぶのか』といった意義を見出し、教師の言葉で子どもたちに伝えていくことが大切になってくる。学習内容によって、スキルの習得に重きが置かれることもあるが、子どもに気づきを促すことが大事である。」等の助言を得た。授業研究会の振り返りでは、以下のような感想が出た。

- ・様々な年齢層、経験年数の教員がいる中、小中合同でポジティブ教育を題材に、指導案を作り上げる機会がもてたことにより、今後の研究の良い流れが作れた。小中合同にしたことで、他学年の取り組みや内容、それぞれのつながりの一端を見ることができた。数年繰り返していけば、ほとんどの学年の実践のつながりが見えてくる。
- ・小中合同で授業研究グループを作ることで、両校種の視点で考えを聞くことができ、9年間を見通してどんな姿に成長してほしいかというゴールを見ながら研究ができたので、大変有意義だった。
- ・今回の思いやりの授業は、中学校の先生方も少しアレンジすれば使えると話されていたので、学級の実態に合わせて必要だと感じた。スキルは、小学校低学年の内容でも中高学年や中学生で継続して学び直していくことがあっても良いと思った。



図7 レジリエンス教育の授業



図8 小中合同による授業研究会

- ・小中交流で行ったことにより、多様な考えが聞けたように思う。ただ、その機会は事例検討会とプレの2回のみで、ほぼ同学年で進める形になっていた。「みんなで研究をした」という実感が無いのが正直な気持ちである。
- ・小学校教員の細やかな気配り、視聴覚支援や既習内容の提示などが授業に生かされていた。また、中学校教員の子どもたちの思考を深める投げかけ、発問も事前に提案され、これも授業の流れを決めるものになっていた。小中合同でやってよかったと思う。

③ 小中一貫校におけるポジティブ教育プログラムの検討

12月には、現職教育を設定し、全教員で年間計画表を基に実践を振り返り、来年度の計画について検討を行った。事前に所員と担当者で打合せをし、小・中学校間で実践の振り返りを共有することで小・中学校のつながりを意識できるようにしていくことをねらいとした。また、来年度の計画を作成する上で、プログラムの実践のみが目的化しないようにするために、カリキュラム・マネジメントの視点で組織的かつ計画的に学校の教育活動に取り入れたり、関連付けたりすることを所員から提案した。

当日は、担当者で研修を運営し、所員はアドバイザーとして参加した。各学年でこれまでの実践を振り返り、実施時期や配列の変更、関連ある教科等を年間計画表に加筆・修正した。また、年間計画表に提言枠を設け、今年度の実践が来年度に生かされるようにした。各学年で検討した後、全体で報告および共有を行った（図9、10）。

ピア・サポート活動については、今年度は、学級の班活動や行事および異学年交流、小中交流などで実践が多く見られた。来年度は、業間の休み時間等を活用し、小・中学校の縦割り活動を取り入れ、小中交流をより日常化していく意見が出ている。中学校では、小学校で学んだスキルや実践を把握し、精選して計画を立てるなど、小・中学校の学びのつながりを意識して計画を作成していた。また、学んだスキルを教科と関連付けて生かすために、問題解決型の学習や協同学習の場面を洗い出し、教科名と単元名をリストアップした。報告の中では、「ピア・サポート活動を進める上で、子どもの困り感を拾い上げることが大事であり、活動を仕組むには教員の工夫がより必要になってくる。」という意見が出ている。

レジリエンス教育については、実施時期や配列を各学年の教育活動に応じて変更した。特に今年度は、レジリエンス教育の授業を道徳と関連付けて実践している学級が見られたため、次年度の計画にも反映されていた。また、他学年での既習内容を発達段階に合わせて組み込んだり、特別活動のキャリア教育と重ねて計画したりしていた。報告の中では、「自己開示できる学級風土が必要不可欠であり、学級や児童・生徒の実態に合わせて実施時期を検討していくことも必要である。」という指摘があった。

担当者からは、「継続して実践を重ねていくと児童・生徒だけでなく教員にもマンネリ化が起り、形骸化しないか危惧する。実践ありきではなく、子どもに身に付けさせたい力や教員の願い、大事にしたい価値を明確にし、年間を通してどの場面で仕組むのかを考えることが大事である。」という話があった。検討会後は、担当者を中心に9年間にわたる年間計画表を取りまとめ、小中一貫校におけるポジティブ教育プログラムを編成した（文末資料1）。



図9 学年での検討



図10 全体での報告

(4) 結果および考察

① 教員対象のアンケート結果

角鹿小中学校の教員対象にアンケート調査を行った。枠内は主な理由や回答を記す。(回答数 32)

ア ポジティブ教育プログラムは学校統合における共通の学校づくりの手立てとして有効だったと思うか。

A そう思う (69%) B 少し思う (28%) C あまり思わない (3%) D 思わない (0)

A・ポジティブ教育は、本校の校訓を具現化するものであり、目指す生徒像、学校像を教員が共有するの
に有効であった。

- ・統合する際に、子どもの心理的負担を軽減できたのではないかと思う。
- ・教員も子どもも全員が、ポジティブ教育に取り組むことで同じ学びを共有できる。
- ・教科だと教科担当者みでの交流になるが、ポジティブ教育プログラムは、小・中学校すべての教員に
共通したものになるため、互いに実践についての意見交換ができる。

B・良い方向に進んでいる実感はあるが、環境が変わり、不適応感を抱いている児童は見られる。

- ・開校後は、子どもたちは緊張した様子だったが、ポジティブ教育を1つの軸としてまとまりが生まれ
たように感じる。

C・特別支援学級においては、あまり実感がもてなかった。

イ 小中一貫校の開校に向けてポジティブ教育に取り組んだことで、児童・生徒、教員にどのような効果や
変化が見られたか。(括弧は回答者の校種を示す。)

<児童・生徒>

- ・新しい友達と関係を作る中で、上手くいかない時や仲良くなりたい時にプログラムで学んだことを思い
出して行動している。(小)
- ・4月に赴任してきたが、統合後と思えないくらい、新しい仲間に対して認め合い、支え合おうとしてい
る姿が見られた。(小)
- ・小学生に関わる中学生の様子から、関わり方を細かく指導しなくてもピア・サポートが自然にできてい
ると感じる。(中)
- ・中学生の小学生に対する優しい眼差しや自然な譲り合いが見られる。(中)
- ・小・中学生が挨拶を交わしたり、声をかけたりする姿が見られる。(小・中)

<教員>

- ・小中交流を前向きに取り組むことができる。(小)
- ・教員自身が、自己のレジリエンスを高め、ピア・サポートで助け合って成長し合える集団組織になるこ
とで、教師が子どものモデルとなり、子どもたちの力につなげていこうとする思いが感じられる。
(小)
- ・ポジティブ教育の「捉え方」や「キーワード」が共有できており、9年間という視点も自然になってき
ている。(中)
- ・小・中学校間で教員同士が会話しやすく、情報共有や意見交換がしやすい。(中)
- ・学級の集団づくりに迷いや混乱がなく、全員が同じ方向性で学級経営ができていると感じる。(中)

ウ 小中一貫校でポジティブ教育プログラムに取り組む効果や良さはどのようなものか。

- ・9年間を系統的に取り組むことで、小中連携をしながら子どもたちに身に付けさせたい力を効果的に育んでいくことができる。
- ・9年間の学びのつながりが明確に見えているのが良い。
- ・小・中学校の9年間に体系的に位置付けられ、若手教員も取り組みやすい。
- ・学校の安心・安全につながるとともに発達段階に応じた成長を目の前で実感できる。
- ・ポジティブ教育は、個人内、学級内、学級間、学年間（校種間）で、フィードバックされ続けるメリットがある。

エ 「5大栄養素」や「THRIVE」を意識して教育活動を展開できたか。

Aできた(19%) B少しできた(34%) Cあまりできなかった(38%) D全くできなかった(0)
無回答(9%)

- A・道徳の授業や日常生活でキーワードとしてよく用いたり、価値付けたりした。
 - ・「5大栄養素」の「感謝」や「思いやり」は道徳の価値項目と重ねて行った。
- B・子どもたちから自然と言葉が出てくるようになった。
 - ・意識はできたが、教育活動につなげる実践が足りなかった。
 - ・「THRIVE」の言葉を用いて、学年通信や学年集会の中で生徒に話をした。
- C・実践が先行してしまい、大きく捉えることができなかった。
 - ・取り組んだ後に、関連していたことに気づくことが多く、計画的に取り組めなかった。
 - ・プログラムの授業以外で取り入れることはできなかった。

オ 小中一貫校でポジティブ教育を持続可能な取組みにしていくためには、今後どのように取り組んでいくとよいか、または取り組んでいきたいか。

- ・自分達で主体的に取り組んでいけるように現職教育を設定する。
- ・プログラムを実践することが目的ではなく、日々の教育活動の中で学んだことを生かしていく。
- ・今後も現職教育で、年間計画の精査を定期的に行う。
- ・本校に異動してきた教員に伝えていくことを大切にする。
- ・気がかりな児童・生徒に合わせてプログラムの実践を工夫していく。
- ・ポジティブ教育の内容で、小1から中3までに本校として身に付けさせたい資質・能力をまとめていく必要がある。

② アセスの結果

児童・生徒の統合後における対人的適応を見取るために、小学4年生～中学3年生を対象にアセス（学校環境適応感尺度）を用いた。対人的適応は、教師サポート因子（教師の支援がある、認められているなど、教師との関係が良好であると感じている程度）、友人サポート因子（友人関係が良好だと子ども自身が感じている程度）、向社会的スキル因子（友人への援助や友人との関係をつくるスキルをもっていると感じている程度）、非侵害的關係因子（友人から無視や意地悪などをされていないと子ども自身が感じている程度）の4つの因子で構成されている。今年度は、この4つの因子に着目した。アセスの適応の指標は、偏差値と同じような性質をもち、平均的な適応状態を50とする。

統合後の6月の結果から、小・中学校ともに良好な数値を示している。特に小学校については、3小学校の統合となり、人間関係づくりにおいて環境の変化が大きく見られたが、4つの因子についてはどの学

年においても大きな影響は見られず、適応状態は良好と言える。また、6月と10月の数値を比較しても、数値の減少はあるものの、高い水準で維持または上昇の結果となり、児童・生徒に望ましい変化が見られた(図11)。

小学校		4年		5年		6年	
		6月	10月	6月	10月	6月	10月
対人的 適応	教師サポート	60	56	67	67	63	61
	友人サポート	58	57	58	62	64	63
	向社会的スキル	55	54	57	61	59	60
	非侵害的關係	65	64	65	63	70	69

中学校		1年		2年		3年	
		6月	10月	6月	10月	6月	10月
対人的 適応	教師サポート	64	66	66	71	58	60
	友人サポート	59	60	60	62	63	63
	向社会的スキル	59	60	63	66	62	61
	非侵害的關係	69	64	65	68	67	69

図11 対人的適応の因子

③ 考察

教員を対象としたアンケート調査および児童・生徒への調査の結果から、以下の3点の考察を行った。

ア 研究体制の確立

昨年度までは、所員中心に研修や情報の共有を行ったが、今年度は、担当者が中心となって研究体制を整え、主体的に研修をマネジメントするなど、学校全体を牽引する姿が多く見られた。特に、昨年度までの各校における実践の記録や教材等の集約および管理、提供をシステム化し、整備したことは、統合後のスムーズな実践につながった。時間の確保が困難な状況において、研修等以外で情報を共有する工夫は、有効であったと考える。また、共通のツールで実践・連携できる仕組みを構築することで、校区外から異動してきた教員でも負担なく取り組み、これまでの実践者が異動してきた教員にアドバイスする姿が見られるなど、教員のポジティブ教育に対する実践意欲や教員間の連携を効果的に高めたと言える。さらに、担当者として所員で、実践と省察を繰り返し行い、他の実践地域や学校等に発信したことは、担当者の力量向上と自信につながった。

学校全体で実践を振り返り、来年度の年間計画を検討したことで、学校や子どもの実態を捉え、実践と点検・評価、そして改善・計画といったPDCAサイクルの流れを作ることができた。また、全教員で年間計画表を学年別に共有することで、9年間の見通しがもて、内容のつながりを意識することができた。さらに、カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れたことは、学年の教員で子どもに身に付けさせたい資質・能力をより意識する手立てとなった。これらの一連のプロセスが、教員の主体性を引き出し、更なる実践への意欲を高めたと考える。

課題としては、小中合同授業研究グループが一時的なものとなり、小・中学校の教員が協働して組織的、計画的に取り組むには、一部不十分であったことが挙げられる。また、今後、異動により教員構成が変わっていくことも踏まえて、小中合同で行う研究組織の構成や研修計画、研修内容をさらに工夫していく必要がある。

イ 小中一貫校の特色を生かした実践

ピア・サポート活動の実践では、活動に制約はあったものの、小中交流における充実の手立てとして幅を広げることができた。小中交流に限らず、学校全体でピア・サポート活動が日常化されつつあり、統合後の望ましい集団形成を支えていると言える。今後、さらなる効果的な教育活動が期待できる。

レジリエンス教育については、小中合同で取り組んだことで、小・中学校の教員が互いに「5大栄養素」や「THRIVE」について共通理解したり、発達段階に応じた手立てやプログラムのつながりを確認したりすることができた。それによって、学びのつながりがより明確になったと言える。また、小・中学校の教員が互いにもつ授業のスキルを生かすことで、教員の授業力向上にもつながった。

これらのことにより、施設一体型を生かして、ポジティブ教育に取り組んだことは、小・中学校の児童・生徒および教員のつながりを促進させ、小・中学校の教員の相互理解を深めたと言える。

課題としては、「5大栄養素」や「THRIVE」を意識して教育活動につなげていく手立てが不十分であったことが挙げられる。アンケート調査からは、意識はできたが、教育活動に展開させていくことについては、困難であったという回答が見られた。指標や価値の意識付けだけでなく、特色ある教育活動に意義付けていく必要がある。ポジティブ教育を中核としたカリキュラム・マネジメントが、関連する教科等を、相互に関連付けたものだけに陥らないようにしていくためにも、学校が設定した育成を目指す資質・能力をベースに「5大栄養素」や「THRIVE」を整理して示す必要がある。

ウ 学校統合および小中一貫校の取組みから見えたポジティブ教育の効果

統合直後は、環境の変化により、対人的適応に影響が出ると予想していたが、本プログラムの実践を地域全体で計画的に取り組んでいくことで、人間関係の構築や集団づくりに一定の成果があるということが調査結果から示唆された。また、教員を対象としたアンケート調査結果からは、地域全体の教員が同じ価値観で子どもを育てていくことで、育てたい子ども像が具現化され、子どもおよび教員の統合ギャップを軽減することにつながったことが分かる。以上のことから、本プログラムが、学校統合における共通の学校づくりの中核として有効な手立てとなることが明確になった。今後、多くの市町において、学校再編が進むことが予想され、希望する地域に本プログラムの提案をしていきたい。

開校後においても、思いやりのある集団づくりが形成され、小・中学校における児童・生徒の関係性は良好であることがうかがえる。また、本プログラムは、小・中学校の教育課程に体系的に位置付けやすいため、9年間を見通して学校間の連携が取りやすく、協働しやすいということが言える。さらに、小学校と中学校は、指導の対象となる児童・生徒の発達段階が異なることから、学習指導や生徒指導、職務の性質も異なっており、組織文化の差異が生じやすいが、本プログラムが小中一貫校における教員の相互理解を深める手立てとなる可能性があると思われる。

2 市全体での実践研究

(1) 鯖江市の小・中学校について

鯖江市は、令和2年国勢調査の結果において、全国的な減少傾向の中、県内で唯一人口が増加している市である。児童・生徒数は年々減少傾向にあるものの、中学校3校、小学校12校は、複数学級の学年構成である中規模校あるいは大規模校が多い。全小・中学校（小学5年以上）で文部科学省国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくりのための意識調査」を毎学期末に実施し、PDCAシートを作成して各校の実践の省察を行っている。鯖江市学校教育基本方針の重点施策「7 子どもたち一人一人のよさを伸ばし学びあえる学校・学級づくり」における主な取組みにポジティブ教育の推進が盛り込まれ、昨年度から福井県版ポジティブ教育プログラムの実践を各校のスクールプランに位置付け、実践している。

鯖江市全小・中学校において、各校の特色を生かしたプログラムの実践およびカリキュラム・マネジメントを意識した取組みとなるよう、市教委および各校のポジティブ教育担当者とは話し合いながら実践研究を進めている。

(2) 鯖江市のこれまでの取り組み

鯖江市では、これまでも一部の学校で、安心・安全な学級づくりの手立てとして、ソーシャルスキル教育またはピア・サポート活動に取り組み、所員が実践の支援を行ってきた。これらの実践を通し、実践校において教員の力量および校内の協働性の高まり、児童・生徒の望ましい変化があった。その有効性に着目した市教委から、昨年度、市内全小・中学校でのポジティブ教育実践の支援の希望があった。本センターでは、今後、市全体で取り組む地域への有効な事例となりうると考え、市教委と協働して3年計画で実践研究を進めることにした。

(3) 実践

① 市教委との協働

市内全小・中学校での実践に向けて市教委と協議を重ね、まずは市全体で実践を進めていくための体制づくりを行った。そして、昨年度および今年度を通して、市全体でポジティブ教育の理解を深め、全教員の共通理解のもとで各校の実態に応じた取り組みとなるための支援を行った。

ア ポジティブ教育年間計画の作成

まず、各校の年間計画表の作成が必要になった。初めて取り組むことになる学校にとっては、プログラムの中から何を選び、どの時期に実施するかを計画を立てることは困難であることが予想された。そこで、市教委と所員で、年間計画の例を数パターン準備し、その例を元に各校の実態に応じて計画表を作成することができるようにした。実践を進める上で必要となる研修は、本センターで作成した研修リストを所員から提示し、各校がリストの中から選択できるようにした。

次年度の年間計画を各校が作成し、提出された年間計画を市教委と所員が確認し、必要に応じて各校に計画の修正点について助言し、提案をしていった。各校が前年度内に計画の修正を行い、年度初めには、スムーズに実施がスタートできるようにした（文末資料2）。

イ ポジティブ教育担当者会の実施

学校の規模に応じて各校1～3名のポジティブ教育担当者を学校が任命し、市教委主催の担当者会を年3回（4月、8月、11月）開催することとした。担当者会は、コロナ禍のため、昨年度および今年度において全てオンラインで実施した。内容は、担当者が各校でポジティブ教育を推進していくために必要と考えられるものにし、担当者会に所員も加わって、指導・助言を行った。

昨年度は、担当者自身の力量形成を図るため、所員によるポジティブ教育の理論と演習を中心とした研修を行った。また、担当者同士がつながり、共に学び合いながら実践を進めていくことができるよう、各校の取り組みを報告する情報共有の場を設定した（図12）。



図12 担当者会

今年度は、教員の主体性を生かし、具体的な実践例をもとに学びを深められるよう、教員による授業実践発表の場を設定した。また、各校の実態に応じた特色ある取り組みを報告する情報共有の場も設定した。情報共有は、初めに小グループで行い、そのあと全体共有を行った。小グループは、校種ごとのグループや中学校区のグループ、異なる中学校区の学校でのグループ等、毎回グループ編成を変えて実施した。

ウ 各校の実態に応じた研修の実施

昨年度は、市全体でポジティブ教育に取り組むスタートの年であったが、年度初めは新型コロナウイルス感染拡大防止のための一斉休校期間となった。そこで、休校期間中に、所員が本プログラムの概要についての研修動画を作成し、市全教員が視聴することで共通理解できるようにした。質疑応答の要望がある学校には、オンライン会議システムにて所員が対応した。

学校再開後には、希望する学校に、授業実践に向けての演習や話し合い活動を中心とした訪問型研修を行

ったり、活動案検討会に参加し指導・助言を行ったりするなど、各校の実情や目的に合わせて研修を継続していった(図13)。

夏には、講師として菱田教授を招聘し、鯖江市ポジティブ教育研修会を開催した。昨年度は、担当者を対象とし、集合型で理論と演習を中心に研修が行われた。菱田教授からは、「ポジティブ教育を教師も子どもも共に楽しんでほしい。すべては学びと捉え、ネガティブもポジティブに捉えていくとよい。」という話があった。この研修の様子は録画し、市内全教員が視聴できるようにした(図14)。今年度は、研修対象を担当者、スクールカウンセラー、相談室担当者、適応指導教室職員とし、鯖江市の子どもに関わるより多くの職員と共にポジティブ教育の理念を共通理解していった。研修内容は昨年度より深まりのある内容で行われ、参加した教員からは「改めて、『5大栄養素』のめづりや、成長する児童に与える影響の大きさを実感した。ポジティブ教育が、学校目標全体の中心になっているものであり、教員は常にそれを念頭に学校教育全体を通して実践していく必要があると感じた。」という感想があった。

さらに、昨年度および今年度、県内の実践地域および参加希望者を対象とした福井県ポジティブ教育研修会を8月にオンラインで開催し、鯖江市の教員も参加した。特に今年度は、前半の菱田教授による講義において、一年間の鯖江市での取組みとポジティブ教育の理念を重ね合わせて聞くことができ、鯖江市の教員からは「菱田教授の講義で、ポジティブ教育の理念と自分たちの実践内容が繋がった。」との感想があった。また、後半に行われたグループ討議では、他地域の教員に鯖江市の取組みを紹介したり、他地域の実践内容や実践方法について質問したりすることができ、「県内のいろいろな学校の事例が聞けて良かった。」といった感想があった。

エ 指導主事訪問日における市教委との協働

ポジティブ教育推進に向け、鯖江市教委の指導主事訪問日において各校がポジティブ教育の実践を必ず盛り込むこと、ICT活用推進のため、ICTを活用した授業を公開することを市教委が学校に示した。所員は、希望する学校の活動案検討会に参加し指導・助言を行ったり、教員の授業づくりに関する質問に対して電話やメール等での助言で継続的に関わったりし、教員と共に授業づくりを行っていった。

指導主事訪問日当日には、指導・助言を希望した学校に所員が出向き、市教委指導主事と共に授業参観をし、役割分担して指導・助言を行った。市教委からは授業スキルやICT活用についての指導・助言が行われ、所員はポジティブ教育の視点で指導・助言を行った。

教員は、ポジティブ教育の理解とICT活用能力の向上が同時にでき、所員にとっても、ポジティブ教育実践におけるICT活用の実践事例を増やしていく良い機会になった(図15)。

オ 授業研究の実施

当初、各校の指導主事訪問日におけるポジティブ教育実践を、市内の教員が参観し合うことで学びの場とすることを想定していたが、コロナ禍により他校での授業参観は困難となった。そこで、市教委と協議し、担当者会において授業者が実践報告をする学びの場を設定することにした。所員は授業者の授業づくりから関わり、授業実践当日の様子は動画撮影した。指導主事および所員は、授業者に対し授業日当日に



図13 訪問型研修



図14 菱田教授による研修会



図15 ICTを活用した授業

指導・助言を行った。さらに、菱田教授に授業動画視聴を依頼し、授業者、指導主事、所員がオンラインで指導・助言を受けた（図16）。

授業者の実践報告準備に対する負担を減らすため、所員は実践報告に向けての打ち合わせを計画的に進め、支援を行った。担当者会では、授業者が授業動画を用いて実践報告をし、菱田教授からの指導・助言を報告に盛り込むことで、担当者全員で理解を深められるようにした。参加した担当者からは「具体的な授業実践の報告が資料や動画で提示されて、とても参考になった。」との感想が見られた。



図16 オンラインでの指導・助言

カ 市全体でのデータの共有

市全体でポジティブ教育を実践するに当たり、市教委が市のサーバーにポジティブ教育の共有フォルダを作成し、鯖江市全教員がデータの共有をしている。この共有フォルダには、各校のポジティブ教育年間計画が置かれており、どの学校がどの時期にどのような実践を行っているのかが分かるようにした。また、授業実践における活動案および教材・教具のデータを置き、参考にしたいと思う他校での実践のデータを活用できるようにした。

② カリキュラム・マネジメントを意識した取組み

学校の教育活動の質の向上のために、カリキュラム・マネジメントが必要となるが、鯖江市では、各校のみでなく、市全体でポジティブ教育を中核としたカリキュラム・マネジメントに取り組むことができるように、PDCA サイクルや教科等横断、資源の活用という3つの視点でカリキュラム・マネジメントの取組みを進めた。

ア ポジティブ教育年間計画表の工夫

各校が作成する年間計画表は、A3版1枚で全学年の1年間のポジティブ教育実施内容が見通せるものにし、主な学校行事、研究推進計画の欄を設け、ポジティブ教育の実践を、それらと重ねて取り組んでいけるようにした。さらに、学期ごとの振り返りおよび1年間の振り返りの欄を設け、PDCA サイクルを実施して取り組んでいけるようにした。これらの内容を1枚にまとめることで、1年間のポジティブ教育実施に関するものが可視化できるようになった。

この年間計画表は、全小・中学校共通の様式であるため、年度末に次年度の計画を立てる際に、他校の計画表を参考にしやすい利点もある。

イ 単元配列表の活用

ポジティブ教育を教科等横断的な視点で学校全体の教育活動に取り入れることで、子どもたちに付けたい資質・能力の育成が効果的に行われるとともに、オーバーカリキュラムを防ぐことができる。この視点については、昨年度初めの所員による研修動画において触れ、全教員に促した。また各校での研修においても繰り返し触れてきた。さらに具体的な手立てとして、単元配列表活用の提案を考えた。だが、全15小中すべての学校が一斉に単元配列表の作成に着手することは困難であり、支援する所員のマンパワーにも限界がある。そこで市教委と協議し、今年度はモデル校を1校決定して単元配列表を作成し、次年度に例として他の学校に示す方向性を共有した。今年度、特別活動の研究を進めている小学校に、全学年での単元配列表の作成を提案したところ、取組みに前向きな返答が得られたため、今年度を通して、単元配列表を作成することとした。年度初めに学年ごとにA3版1枚で作成し、単元配列表の中心に特別活動およびポジティブ教育の欄を設け、教科や学校行事等との関連を線でつないでいくようにした。これらの取組みは、低中高学年部会ごとに定期的に振り返りとして行われ、ポジティブ教育と教科等を重ねて実施したり、実施時期を入れ替えたりすることで、よりよい実践につなげていけるようにした（文末資料3）。

ウ 教材資源の活用

各校で作成した活動案やワークシートを市共有フォルダに置いて、市内全教員が共有できるようにし

た。また、教具等の校内での整理・保管について、ポジティブ教育担当者会で話題にし、担当者が各校で工夫して進めてきた。

(4) 結果および考察

① 教員対象のアンケート結果

各校のポジティブ教育担当者を対象にアンケート調査を行った。枠内は主な理由のみ取り上げる。

(回答数 15)

ア ポジティブ教育は、安心・安全な学級づくり、学校づくりの手立てとなっていると思うか。

A そう思う (60%) B 少し思う (33%) C あまり思わない (7%) D 思わない (0)

E どちらとも言えない・分からない (0)

- A・SST、ピア・サポート、レジリエンス等、どれも児童・生徒の生活のベースになる、学級づくりの指針となるものである。教員が、児童・生徒が安心して楽しく通える学校・学級づくりをしようと心がけるきっかけとなり、意識し続けることができて良かった。
- B・ポジティブ教育を通して、児童・生徒が自己を見つめたり、他者との関わりについて考えたりすることは、学級や学校づくりの手立てとなっている。
- C・1つの活動が5～10分位であると、普段の学校生活の中に取り入れやすい。

イ 市全体でポジティブ教育に取り組む効果や良さを感じることはあるか。

A ある (47%) B 少しある (33%) C あまりない (7%) D ない (0)

E どちらとも言えない・分からない (13%)

- A・どの学校に異動してもデータがあり、柔軟に対応できる。
 - ・年間計画作成において、各校の課題を共有し助け合いながら、次年度の計画を立てることができた。
 - ・同じ内容の実践でも各校で取り組み方が違うので、多様な方法を検討でき、情報交換ができる。
- B・中学校に入学してきた生徒が、それぞれの小学校でポジティブ教育に取り組んできており、話がしやすい。
- C・あえて15校全体で取り組むのではなく、個々の学校、学級の実態に合わせた活動を取り入れ、その結果、児童・生徒にどのような変容があったかを報告し合う方が、色々なパターンができて次の取組みにつなげやすいのではないかと。
- E・鯖江市全体で行う行事がこの2年ほとんどなく、何とも言えない。
 - ・全体が研修できて一斉に取り組んでいるので、共有できてよいと思うが、校種や学校によっても事情が違うので一概には言えない。研修の回数が多くて、教員の負担になるのであれば、それは良くないと思う。

ウ ポジティブ教育担当者会は、市全15小中でポジティブ教育を進めていく上で、どのような効果があったか。

- ・先進実践を聞くと、自校でもやってみたいという気持ちになった。「あの学校のあの先生に聞いてみよう」と、質問したいことに確実に答えてもらえる対象が決められたことも良かった。
- ・校外にも、実践内容が共有でき、授業に関する相談ができる人ができた。
- ・情報交換することにより、実践が深められ、来学期、来年度の計画の参考になる。鯖江市として実践を蓄積しており、自校の取組みの向上につながった。

エ 市共有フォルダにおいて、市全15小中のデータを共有することで良かった点は何か。

- ・実践報告を聞いて、チャレンジしてみようと思ったときに、資料がすぐに見られる点は大変良かった。
- ・他校のデータを見て参考にすることができた。メールで送信し合わなくても、データをフォルダに入れるだけなので手間が省ける。
- ・年間計画を相互に見合い、参考にすることができた。

オ ポジティブ教育実践においてどのように ICT を活用し、どのような効果があったか。

- ・活動のモデリングを動画で見せることにより、T2がいなくても授業が進められた。
- ・ICTで子どもたちの意見や、子どもたちが描いたレジリエンス曲線を共有することで、理解を深め、他者との違いに気づき、互いの意見をより深く知りたいという意欲の向上につながった。
- ・行動規範を育てる「5大栄養素」の指導で、ICTを使用している。児童が決めた1週間のめあてを達成できたら、振り返りをして担任に送り返す学習をしている。児童一人一人の考えに、寄り添うことができ、声かけや見守りの参考にすることができている。
- ・「24の強み」をロイロノートでいつでも見ることができるようにした。すぐに「強み」を表示できるので、機会をとらえて、「今のは、この強みだね。」などと話してあげることができた。「ひみつの友だち」を行うとき、友だちの良いところは、「強み」のどれにあたるか確認し、カードに書くようにした。児童は、1年かけて、自分の「強み」が何かを客観的に知ることができた。

カ ポジティブ教育において、カリキュラム・マネジメントの視点でどのような取組みを行い、どのような効果があったか。

- ・特別活動を中心とした年間指導計画を作成した。各教科との関連が分かりやすくなった。作成してみて、入れ替えた方がいい内容に気づき、次年度への改善につなげようと考えた。
- ・教科（特に道徳）や学級活動と絡めて実施した。（個性尊重を学んだ後に「良いところ見つけ」をして手紙に書く。仲良しポストの作成。秘密のともだち。レジリエンス曲線）ポジティブ教育だけを行うより、教科横断的に取り組むことで、より子どもたちが実感を伴って活動できた。
- ・ポジティブ教育で使用する教具を職員室の決まった場所に入れておき、いつでも誰でも使用できるようにした。また、フォルダを作成して、使ったワークシートや指導案などを共有できるようにした。ポジティブ教育を実施しようと思った時にいつでもできる。また、クラスや学年によってアレンジされたものもあり参考になる。
- ・SASAアンケートをもとに、生徒に必要な力を付けさせるために、3学年で相談し合って授業内容を吟味できた。

キ 担当者として取組みを進めていく上で、困難を感じた点は何か。

- ・日々忙しく、ポジティブ教育にじっくりと取り組む時間的な余裕がない。
- ・負担にならず、自分の学級に必要なことを選び活用できる方法があればいい。
- ・活動の評価はどうするとよいか。
- ・様々な実践を状況に応じて選び、本校の生徒の実態に応じて、毎回指導案をアレンジした。担当者同士、相談し、学年会では授業の目的、内容などを説明したが、それでも、全ての教員に授業の意図や活動の流れなどに対する共通理解を図ることは難しいと感じている。授業は実践を重ねることで、自分のものになっていくためである。

各校の管理職を対象にアンケート調査を行った。枠内は主な理由のみ取り上げる。（回答数15）

ア ポジティブ教育は、安心・安全な学級づくり、学校づくりの手立てとなっていると思うか。

A そう思う(87%) B 少し思う(13%) C あまり思わない(0) D 思わない(0)

E どちらとも言えない・分からない(0)

- A・児童各自の精神面での安定が、居心地の良い学級・学校を作っていく基盤となる。小さいうちから、物事に対する考え方やストレス処理のスキルを身に付けることは、円滑な人間関係構築に効果的であり、大切であると思う。
- ・教員がピア・サポート、レジリエンスの考えを意識して児童に話したり、実践したりしてきたことが、コロナ禍の中での児童の言動に良い影響を与えていると感じることがしばしばあった。

・児童一人一人が「みんなで頑張っていこう」と前向きな姿勢になることで、まとまりのある学級づくりにつながっている。そのため、担任が児童の様子を見やすくなり、児童同士のトラブルを早期に発見でき、素早く解決に向かうことができていた。

B・他の様々な手立てと相まって、効果を上げていると思う。

イ 市全体でポジティブ教育に取り組む効果や良さを感じることもあるか。

Aある(47%) B少しある(47%) Cあまりない(0) Dない(0) Eどちらとも言えない・分からない(6%)

A・他校の実践を参考にしたり情報交換したりできる良さがある。また、中学校進学時には、複数の小学校が一つになるので、学校差がないよう市全体で取り組んでいくことは必要だと思う。

・授業のUD化に対する取組みと同様で、市全体で取り組むことで実践例が増えるとともに研究会などでの検討もより深いものとなるはずである。また、異動しても継続して取り組み、発展させられる良さもある。

B・市全体で取り組む効果や良さは、研究集会や研究授業、指導者交流を経て感じられるものだと思う。コロナ禍によってその機会の多くが奪われているが、参加者は多くの学びを得られたと思う。

・学校や地域の実態に応じた、9年間を見通したポジティブ教育の実践が可能となる。

・ポジティブ教育という視点を共通にもつことで、児童の実態や様子、効果的な進め方について市内教職員同士で意見交換できるのが良い。

E・他の小・中学校の実践の様子や、効果のあるなしの情報が無いため。

ウ ポジティブ教育を実践し、校内の教員および児童・生徒にどのような効果があったか。

〈教員〉

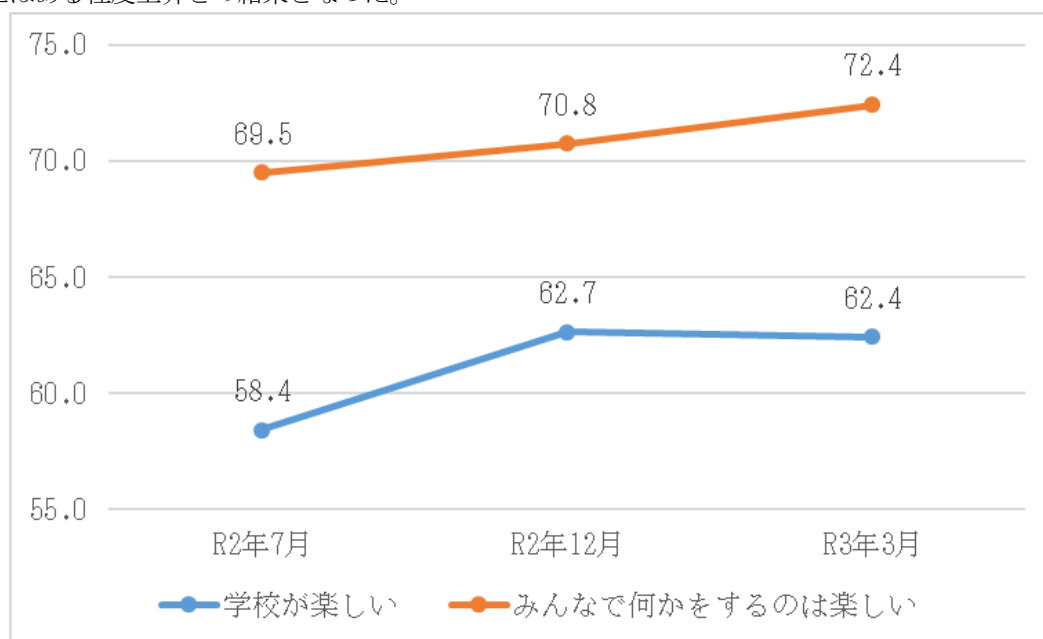
- ・ポジティブ教育の考え方、手法を、他の教育活動に生かせるようになる。
- ・教えるためには、教員自身も実践した上で児童生徒に対する必要がある。このことは、時折漏れ聞こえる教員間の会話から、教員自身のメンタルヘルスにも効果があるように思える。
- ・研究主任を中心に全校体制で組織的に取り組む意識の向上が見られた。
- ・ピア・サポート、SST、レジリエンスの3つの分野の実践のために研修を積むことが、学級づくりや児童理解に大変役立ったようである。

〈児童・生徒〉

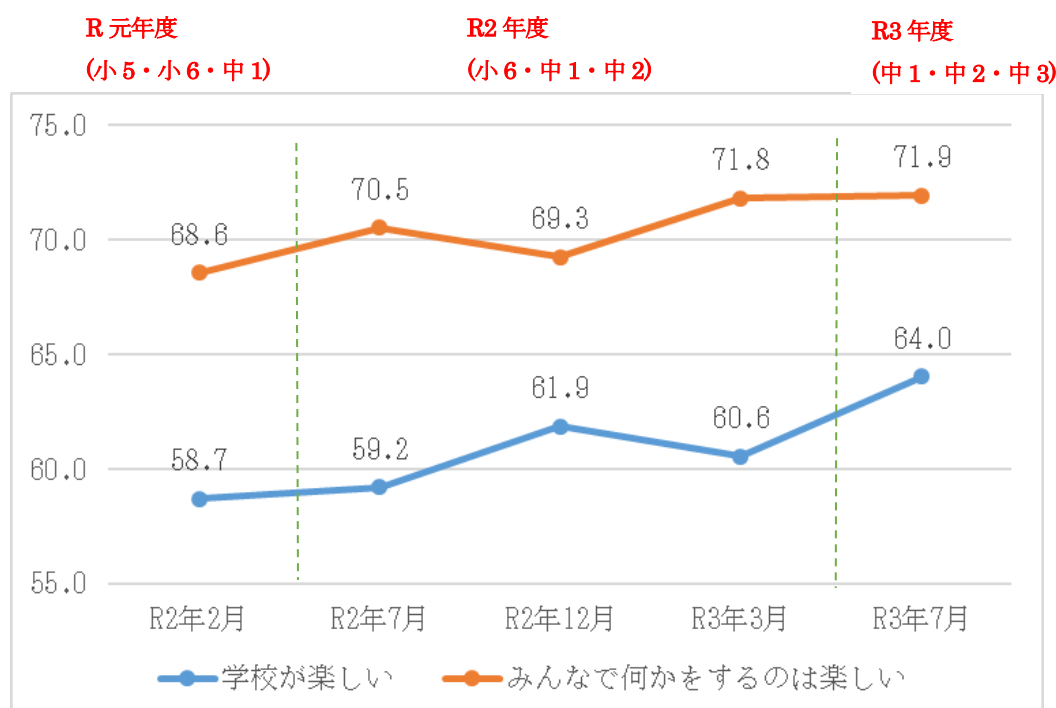
- ・友達の良いところを見つけて、それを互いに認め合うことで、自己肯定感が高まり、物事に主体的に関わろうとする態度が見られるようになってきた。
- ・計画的に継続的に行うことで、児童間で「レジリエンス」「ピア・サポート」などの会話も聞かれるようになり、困難を乗り越えようとする考えやポジティブに捉えようとする考えを日常的に意識できるようになってきている。
- ・計画的に授業を行うことで、児童の中にレジリエンスの力が徐々に身に付いてきている。自分自身を見つめ直す機会にもなっており、児童の振り返りに前向きな気持ちが表れていた。
- ・生徒がより主体的に堂々とパフォーマンスをすることができるようになっている。

② 魅力ある学校づくりのための意識調査結果

鯖江市では、小学5年生から中学3年生を対象に、「魅力ある学校づくりのための意識調査」を学期末ごとに実施しており、令和2年度における小学5年生から中学3年生全体の「学校が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」の項目の変化を見た。それぞれの項目に対し、「当てはまる」、「どちらかという当てはまる」、「どちらかという当てはまらない」、「当てはまらない」の4件法から、「当てはまる」に回答した児童・生徒のパーセントを示す。意識調査の結果から、両項目について、いずれも数値は維持またはある程度上昇との結果となった。



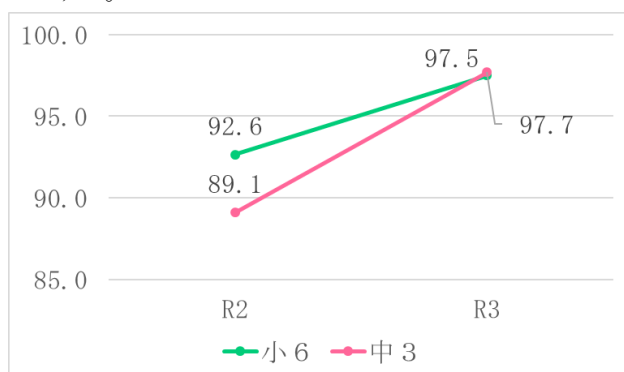
また、令和元年度時に小学5年生、小学6年生、中学1年生であった児童・生徒の同一集団としての変化を経年で見たとした。「学校が楽しい」「みんなで何かをするのは楽しい」の項目について、どちらも数値は概ね上昇する結果となった。



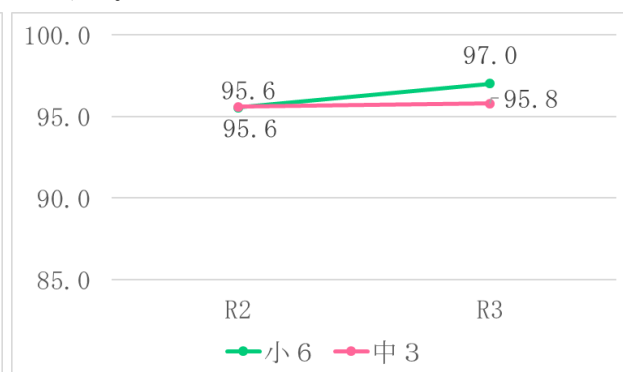
③ 質問調査の結果

福井県学力調査「生活や学習、学級に関する調査」の質問紙における「ポジティブ教育に関する項目」より、経年で変化を見取ることのできる、今年度の小学6年生および中学3年生全体の、昨年度からの数値の変化を見た。それぞれの項目に対し、「そう思う」、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「思わない」の4件法から、「そう思う」「まあまあそう思う」に回答した児童・生徒のパーセントを示す。なお、以下の質問項目は、「THRIVE」をもとに作成している。数値はいずれも維持またはある程度上昇との結果となった。

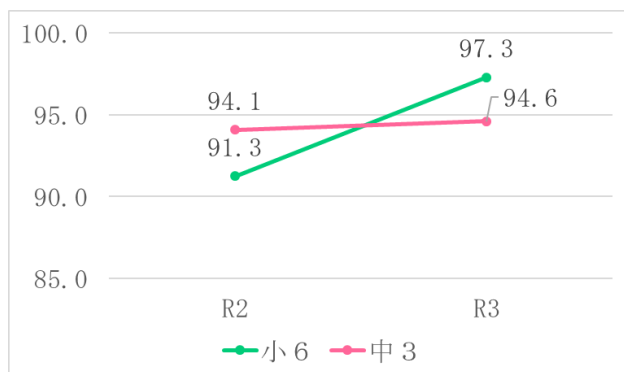
ア いろいろな経験は自分の学びになると思えますか。



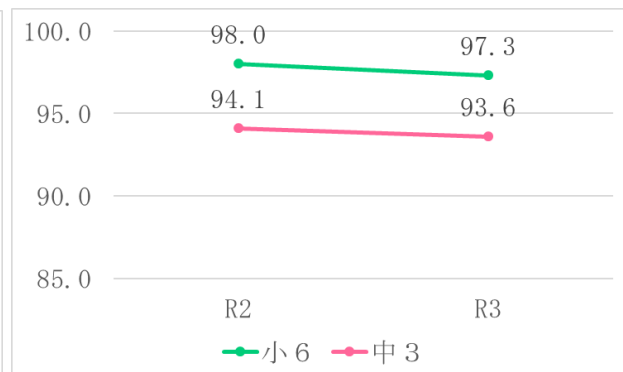
イ 支えられて生きていくと感ずることがありますか。



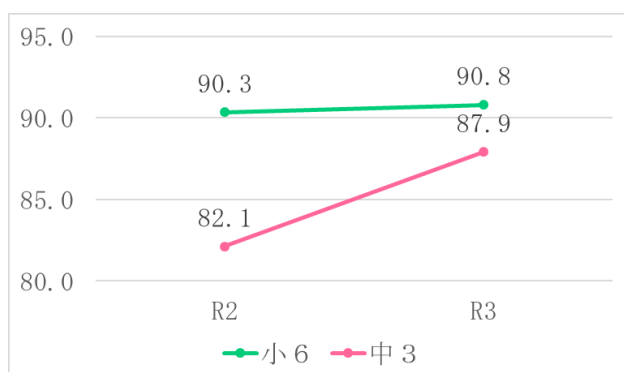
ウ 自分や人を大切にしていますか。



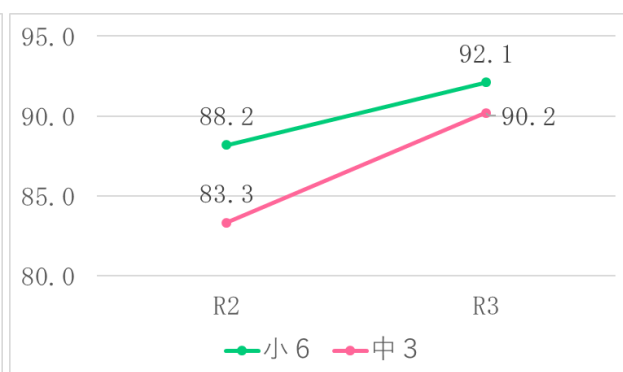
エ わくわくしたり、夢中になったりするものがありますか。



オ まわりをよりよくしようと取り組んでいますか。



カ あきらめずに、前向きに物事に取り組んでいますか。



④ 考察

教員を対象としたアンケート調査および各校で実施している児童・生徒への調査の結果から、以下の2点の考察を行った。

ア 市教委との協働

市全体で実践を進めていくために担当者会を設定し、定期的に情報共有を行ったことで、各校の担当者同士のつながりができ、鯖江市全体で学び合おうという雰囲気が生まれた。また、指導主事訪問日において市教委指導主事と共に授業者に指導・助言を行うことで、学校、市教委、所員で効果的に学び合うことができた。

初年度当初は、新型コロナウイルス感染拡大防止のための休校期間であり、児童・生徒にとってスムーズなスタートとは言えなかったが、休校期間に所員が作成した研修動画を全教員が視聴する時間が確保でき、全教員のポジティブ教育への理解につながった。また、所員が各校のニーズに応じた校内研修を行ったことで、各校の実態に応じた支援となり、教員のポジティブ教育への意識が高まった。

市全体で取り組んだことにより、教員のポジティブ教育への理解が深まり、ポジティブ教育の考え方、手法を、様々な教育活動に生かすことができた。市内の小・中学校での異動であれば、異動後の学校においてもポジティブ教育に継続的、発展的に取り組むことができ、教員にとって持続可能な取組みの素地ができたと言える。また、中学校の教員にとっては、校区内の全児童がポジティブ教育に取り組んできているため、中学校に入学した際のポジティブ教育に関する共通の指導が可能となった。さらに、ポジティブ教育の理解が教員自身のメンタルヘルスにもつながった。

また、市全体の児童・生徒に温かい雰囲気が生まれ、よりよい関わりができるようになってきた。児童・生徒が自分自身を見つめ直し、前向きな気持ちになったり、自信をもって主体的に堂々とパフォーマンスをすることができるようになったりした。

管理職のアンケートからは、市内全ての教員が、ポジティブ教育という視点を共通にもつことで、児童・生徒の実態や様子、効果的な進め方について意見交換できるよさが挙げられた。また、中学校進学時には、複数の小学校が一つになるので、学校差がないよう市全体で取り組んでいく必要性も挙げられた。

鯖江市は ICT 活用の意識が高く、市教委と協働することで、ポジティブ教育推進と ICT 活用推進を重ねて行うことができた。本センターにとっては、ポジティブ教育実践における有効な ICT 活用実践事例として蓄積することができた。

本センターが市教委と協働することで、担当者が他校の教員とともに学ぶ場を多く提供でき、校内での実践も進んだ。一方で、担当者以外の教員が他校の教員と学びを深める場は十分に提供できなかった。市内全小・中学校教員の学びをさらに充実させていくために、市教委と協議し、研修会や研究授業等の在り方を見直し、年間を通して計画的に実践を進められるようにしていく。

イ カリキュラム・マネジメントを意識した取組み

学校現場では、GIGA スクール構想による情報モラル教育の推進や、社会の変化に伴って求められている様々な教育内容を扱っている。ポジティブ教育においても教科等横断的な視点で学校全体の教育活動に取り入れることで、子どもたちに付けたい資質・能力の育成が効果的に行われるとともに、オーバーカリキュラムを防ぐことができることを、研修を通して教員に伝えてきた。昨年度は、教員がポジティブ教育について理解することに重点を置き、各校で実践を進めた。その結果、教員のポジティブ教育についての理解が深まり、取組みの2年目となる今年度は、学級活動だけでなく学校行事や教科の中に取り入れて実践する学校が増えた。カリキュラム・マネジメントの視点から、ポジティブ教育を効果的に活用している様子がうかがえる。

また、ポジティブ教育年間計画表をA3版1枚にし、1年間のポジティブ教育実施内容、主な学校行事、研究推進計画、学期ごとの振り返りの欄を設け、可視化することでPDCAサイクルを実施して取り組んでいくことができた。年間計画表を全小・中学校共通の様式にしたため、他校の計画を参考にしやす

く、他校の実践や振り返りを自校の取組みに生かす学校があった。

カリキュラム・マネジメントを進める上で、資源の活用は一つのポイントである。県内で唯一、市内全小・中学校で一斉にポジティブ教育に取り組んでおり、各校の実践事例が膨大に蓄積されることが鯖江市の強みの一つと言える。市共有フォルダを利用して他校の実践を参考に、自校の実践へアレンジして取り組む学校が多く見られた。

ポジティブ教育をより学校の実態に応じた形で取り入れるためには、さらに教科等横断的な視点で進めていく必要がある。今年度、ポジティブ教育を中心に置いて単元配列表を作成してカリキュラムの見直しを行った小学校の例や、行事や教科の中に取り入れて行った実践事例を提示するなど、具体的な提案をしていく。また、教員が効果的に行事や教科等の中に取り入れてプログラムを有効に活用するために、ポジティブ教育で育まれる資質・能力を整理し、学校に示していく必要がある。さらに、市共有フォルダについても、教員が求めるデータを見つけやすいものになるよう、市教委とともに見直し、教員にとってより使いやすいものにしていく。

Ⅲ 今後の取組み

本センターでは、令和元年度に「福井県版ポジティブ教育プログラム」を菱田教授の指導・助言を得ながら作成し、園小中連携の実践モデル、学校統合および小中一貫校での実践モデル、市全体での実践モデルと、さまざまな形態で実践研究を進めてきた。これらの実践研究を通し、地域全体で取り組むことで、本プログラムが地域や学校が目指す児童・生徒像の具現化への手立てとなり、発展性のあるプログラムとなることが示唆された。

中央教育審議会答申において、今回の学習指導要領改訂の全体像として、これからの社会を作り出していく子どもたちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し、育てていくことが示されている。この理念を実現するための手立ての一つとしてカリキュラム・マネジメントの充実が求められている。学校現場は、子どもたちに育てたい資質・能力とは何かという視点で、さまざまな教育活動を組み立てており、そのためにも、ポジティブ教育で育まれる資質・能力の明確化が必要である。これらを受けて、今後の方向性を2点示す。

第一に、ポジティブ教育を通して育成を目指す資質・能力を再整理し、新学習指導要領の3つの柱（「知識・技能」、「思考力・表現力・判断力等」、「学びに向かう力・人間性等」）で示していくことである。本プログラムは、特別研究員の菱田教授の助言を得ながらこれまでの所員によりブラッシュアップされ、活動案としてまとめた形で学校現場に提案されてきたものである。所員は、教員がポジティブ教育の理論を理解し、今ある教育活動の中に取り入れて実施するための現職教育を継続して行ってきた。本センターが、さらにカリキュラム・マネジメントの視点から本プログラムを新学習指導要領の3つの柱で再整理し、提案していくことで、学校が学校教育活動全体を通じてポジティブ教育を体系的に実施することができると考える。そうすることで、本プログラムが目指す児童・生徒像の具現化へのよりよい手立てになりうると思われる。

第二に、本プログラムの具体的な実践事例を増やし、示すことである。本プログラムを実践する地域や学校の実態、ニーズはさまざまであり、本プログラムを有効に機能させるための知見の蓄積が必要となる。実践地域や校種を広げ、本プログラムの実効性を高めるための支援の在り方を追究していく。

本プログラムは、どの発達段階においてもアレンジして実践することが可能であり、教師の専門教科やキャリア段階を問わず協働して実践を重ねていけるものである。本プログラムは、児童・生徒はもとより教師も幸福な人生の創り手となる力を育むことのできるプログラムである。今後、本プログラムを更に発展させ、県内の多くの学校でのよりよい教育活動につながるよう実践研究を重ねていきたい。

最後に、本研究実践のためにご協力いただいた小・中学校の教職員の皆様、ご指導いただいた立命館大学教職大学院の菱田準子教授にこの場を借りて心より厚くお礼申し上げます。

参考文献

- (1) 菱田準子 (2018～2019) 『ポジティブ心理学で学校づくり』ほんの森出版
- (2) 栗原慎二・井上弥編著 (2015) 『アセスの使い方・生かし方』ほんの森出版
- (3) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編』
- (4) 文部科学省 (2016) 『小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き』

主な学校行事		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
前年度からの提言		(8)入学式 (12,13)体験入部 (14)委員会 (16)1年生を迎える会 (28)避難訓練 (30)オーブンズスクール	(10)委員会 ()全国学力調査(小6、中3) ()市学力調査(小5、中2) (16)北地区体育大会 (23)東郷地区体育大会?	(1,2)5年宿泊学習 (4)体育大会 ()標準学力調査 (30)オーブンズスクール	(5)委員会 (19)ミニ通知表配付	(20)全校登校日	(2)青宮 (3)ふふると休業 (4)山車巡業(授業日) (16,17)6年修学旅行 (19)赤崎の獅子舞 (29)避難訓練 ()期末考査 ()社会体験活動(中2) ()修学旅行(中3)	(6)オーブンズスクール (21)体育大会 ()校外学習(中2)	(10)小・中音楽発表会 (11)オーブンズスクール (12)オーブンズスクール 合唱コンクール (19)避難訓練 (25)就学時健診 ()マラソン大会 ()校外学習(中1) ()学力診断テスト(中3)	(6)委員会 (20)ミニ通知表配付 ()SASA(小5、中2) ()漢字計算コンテスト ()標準学力テスト(中1) ()確認テスト(中3) 入権週間	(11)委員会 (12)書き初め大会 (25)新入生体験入学 (27)新入生保護者説明会 (28)新入生保護者説明会	(7)委員会 (22)オーブンズスクール 卒業生を送る会 ()私立高校入試 ()期末考査 ()県立高校入試	(7)委員会 (11)卒業式?
	小学校 中学校 小中共通												
レジリエンス			ピアサポ①話し手の立場で「心地よい聞き方について考えよう」	ピアサポ②相手の表情や口調から「気持ちを読みとろう！」 ピアサポ③自分の気持ち伝える「気持ちのよい話を伝えよう」	ピアサポ④適切な自己表現で「上手な断り方」			①立ち直るために必要な力 ②ネガティブ感情からの脱出 - 自分の脳を上手に使う - ③ネガティブ感情からの脱出 - ネガティブ感情が教えてくれること -	③ネガティブ感情からの脱出 - ネガティブ感情が教えてくれること -	④ネガティブ感情からの脱出 - 赦しの力 (FORGIVENESS) -	ピアサポ⑤「応答の仕方」 「うわさ話への対処法」	ピアサポ⑥ SNS利用の解決策を話し合う「LINEトラブルへのアドバイス」	
ピアサポ			学活: 体育大会に向けて	学活: 小5との軍歌塾 総合: 校外学習に向けて	学活: 学年レクリエーション (夏の大感謝祭)	学活: さわやかな挨拶大作戦			総合: 校外学習に向けて	学活: 学年レクリエーション (冬の大感謝祭)			学活: 学年レクリエーション (春の大感謝祭)
他教科との関連				道徳: 「どうせ無理」をなくしたい	道徳: 「まだ進んでる〜イチャロー選手の生きか〜」								
レジリエンス								①レジリエンスを鍛える - 小さな成功体験を積み重ねる - ②レジリエンスを鍛える - 他者からみた自分の強み -	②レジリエンスを鍛える - ポジティブ・セルフワークを持つ - ③レジリエンスを鍛える - 他者からみた自分の強み -	④自分の強みの木の揭示 ⑤レジリエンスを鍛える - 強みTEAMづくり -			
ピアサポ			学活: 学年レクリエーション 部活動: 夏季大会に向けて	学活: 学年レクリエーション 部活動: 夏季大会に向けて	学活: 4月からの振り返り	部活動: 新入大会に向けて		生徒会活動: 小中提携運動	進路学習: 職場体験	生徒会活動: 校内放送 生徒会活動: 小中にごこ交流会		学活: 進路学習 生徒会活動: 新中1の質問に答えよう会	学活: 卒業式に向けて
他教科との関連													
レジリエンス				①レジリエンスを鍛える - 未来のシナリオを書き直す -				②レジリエンスを鍛える - 魂が響く私の WAKUWAKU - ③レジリエンスを鍛える - WAKU WAKUを生きる -	②レジリエンスを鍛える - 魂が響く私の WAKUWAKU - ③レジリエンスを鍛える - WAKU WAKUを生きる -				④レジリエンスを鍛える - 自分にありがとう、そしてみんなにありがとう -
ピアサポ			学活: 体育大会			学活: 修学旅行		家庭: 保育実習(小1へ)			学活: 自分の強みを入試に生かす		
他教科との関連								道徳: 「無限の時期」					

ピアサポトトレニングは、小学校の SSTの内容を確認してから、年度はじめに学年スタッフで検討していくとよい。
ピア・サポト活動を、日常生活の中に落とし込んでいくことを考える必要がある。
ピアサポのトレーニングをすることは重要であるが、慣れてくると、マンネリ化して効果が弱くなるので、プログラミングも縮小して考えていくとよい。
レジリエンスは、前年度のことを参考にしつつ、学年で打ち合わせが必要がある。
生徒指導上、気がかりな生徒に対するレジリエンスの指導法が難しい。(自分と向き合ったり、人に自分のことを言われることを嫌がったりする。)
2年生は、特に生徒会を中心に学校全体で小中交流を図れる機会が多い。
人権週間と合わせて実践することができるとよい。

レジリエンスの授業は、部活動引退前や卒業目前に計画するとよい。「レジリエンスの授業=受験のため」というメッセージにならないようにしていきたい。
卒業シーズンにレジリエンスの授業を計画してもよいと思う。受験前に自分の強みを生かせるようにもう一度実践しても良いと思う。

令和〇年度 ポジティブ教育年間計画

鯖江市〇〇小学校

	主な学校行事	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
4月	(8)入学式 (24)PTA総会						
5月	(16)体育大会 (28)遠足	SST② 人の話に注意深く耳を傾ける「上手な聴き方(友だちのことを知ろう)」			SST① 安心して何でも話せる学級に「互いの違いを認め、高め合う」		
6月	(18)指導主事学校訪問 (SST:共同参観 3年生)	SST① 安心して何でも話せる学級に「互いの違いを認め、高め合う」			SST② 人の話に注意深く耳を傾ける「上手な聴き方(友だちのことを知ろう)」		
7月	(16)保護者会	SST④ 友だちのよいところを見つけて伝える「よいところさがし」					
8月							
9月	(13)連体	SST⑤ 相手の表情や口調などから「相手の気持ちを考えよう」					
10月	(6・7)遠足・修学旅行 (22)マラソン大会 (28)連音	SST⑥ 相手も自分も大切にしたいコミュニケーションの方法「気持ちのよい話し方」					
11月	(13)指導主事学校訪問(教科:共同参観 5年生) (20)学習発表会学校公開	SST⑦ 気持ちすころくを通して「感情を周りの人に伝えよう」					
12月	(17)保護者会	SST⑧ グループの仲間とルールを守って話し合い「力を合わせて」					
1月		レジ小1-① 失敗は成長のチャンス！ レジ小1-② 聞いてくれてありがとう	レジ小2-① NO!と 言える勇氣 レジ小2-② 感謝したいこと -感謝のころ-	レジ小3-① クラスのためにできる表情や姿勢 レジ小3-② 捉え方を 変えようと感謝できる	レジ小4-① 立ち直るときに成長できるレジ エンス レジ小4-② 立ち直る力の 正体	レジ小5-① 自分の「強み」に気づく レジ小5-② 強み チームスゴロク -強みを 役立てよう-	レジ小6-① レジリエンス 曲線を描こう レジ小6-② 困りごとを 解決しよう -課題 解決の5つのステップ
2月	(19)なわとび大会	レジ小1-③ 元気をなくす 気持ちにバイバイ - FORGIVENESS Breach-finish-	レジ小2-③ 怒りを しずめる 亀の方法 - TLC's Tucker Turtle	レジ小3-③ コント ロール できるもの とできないもの	レジ小4-③ 立ち直るために 必要な力 - 気晴らしの5つの方法-	レジ小5-③ 自分を 支えてくれる人・もの・ こと - コラボレーション制作-	レジ小6-③ 自分の困りごとを 解決しよう - 課題解決の5つの ステップ-
3月	(10)卒業生を送る会 (18)卒業式	レジ小1-④ 「思いやり」のヒーローになろう	レジ小2-④ 思いやりの3つの ステップ	レジ小3-④ 自分を 励ます 言葉をもと - ブックマーカー	レジ小4-④ 立ち直るために 必要な力 元 気アップ できるもの の見方	レジ小5-④ 自分を 支えてくれる人・もの・ こと - コラボレーション 流-	レジ小6-④ 愛に あふれる 社会を 創る 一 員に なる - ストーリー づくり-

<校内研究推進体制について>
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

<1学期の成果と課題>
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

<2学期の改善策>
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

<2学期の成果と課題>
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

<3学期の改善策>
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

<次年度の改善策>
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
 ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

年間指導計画表 5 年生

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	見立てる	見立てる	見立てる	みんなが過ごしやすい町へ	敬語	敬語	敬語	敬語	あなた	冬	この本、お読みします	この本、お読みします
書写	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方	書くしせいと用具のあつあい方
社会	世界の中心地	世界の中心地	世界の中心地	米づくりのさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域	水産業のさかんな地域
算数	整数と小数	整数と小数	整数と小数	合同な図形	分数①	分数①	分数①	分数①	面積	面積	面積	面積
理科	天気の変化	植物の発芽と成長	魚のたんじょう	花から実へ	台風と天気の变化	台風と天気の变化	台風と天気の变化	台風と天気の变化	物のとけ方	物のとけ方	物のとけ方	物のとけ方
音楽	歌頭をひびかせて音の重なりを感じ取ろう	歌頭をひびかせて音の重なりを感じ取ろう	歌頭をひびかせて音の重なりを感じ取ろう	いろいろな音色を感じ取ろう	和音の移り変わりを歌じ取ろう	和音の移り変わりを歌じ取ろう	和音の移り変わりを歌じ取ろう	和音の移り変わりを歌じ取ろう	詩と音楽の関わりを味わおう	詩と音楽の関わりを味わおう	詩と音楽の関わりを味わおう	詩と音楽の関わりを味わおう
図工	のぞいてみると	のぞいてみると	のぞいてみると	形が動く 絵が動く	糸のコースイス	糸のコースイス	糸のコースイス	糸のコースイス	使って楽しい焼き物	使って楽しい焼き物	使って楽しい焼き物	使って楽しい焼き物
家庭	クッキング	クッキング	クッキング	はじめてのクッキング	クッキング	クッキング	クッキング	クッキング	クッキング	クッキング	クッキング	クッキング
体育	短距離走・リレー	短距離走・リレー	短距離走・リレー	ベースボール型	ベーสบール型	ベーสบール型	ベーสบール型	ベーสบール型	ネット型	ネット型	ネット型	ネット型
外国語	Hello, friends. When is your birthday? What do you want to study?	Hello, friends. When is your birthday? What do you want to study?	Hello, friends. When is your birthday? What do you want to study?	He can bake bread.	Where is the post office? What would you like?	Where is the post office? What would you like?	Where is the post office? What would you like?	Where is the post office? What would you like?	Welcome to Japan.	Welcome to Japan.	Welcome to Japan.	Welcome to Japan.
道徳	人生といぬぎすてら	人生といぬぎすてら	人生といぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら	ぬぎすてら
総合	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	宿泊学習を成功させよう	環境について調べよう	環境について調べよう	環境について調べよう	環境について調べよう

6 年生を送る会を成功させよう

6 年生を送る会を成功させよう

6 年生を送る会を成功させよう

6 年生を送る会を成功させよう

学習をいかにして

書きぞめ

文字の大きさ

書く場面と目的

書くリズム

字形の整え方

整数と小数

天気の変化

整数と小数

整数と小数

教室移動

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会

委員会